

## 巻頭言

研究科長 百瀬 由美子

世界中を脅威と不安に陥らせ、甚大な被害をもたらした新型コロナウイルス感染は、新たな変異株の出現を繰り返し、発生から3年が経過した今年も第8波の到来により、医療逼迫をもたらす勢いで拡大しました。ピークアウトはしたもののこの間に、看護学研究は、そのフィールドである病院や施設等のクラスターの発生等で研究の遂行に影響を受けたかどうかは定かではありませんが、2023年発刊の第18巻では、投稿論文が総説1編に留まったことをやや残念に感じています。本紀要では、このほかに文部科学省が令和3年度補正予算で事業化した「ウイズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業」に本学が申請し、採択された3つのプロジェクトの中間報告を特集として掲載されています。この事業は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、医療人材養成課程の学生等が実習の中止や縮小を余儀なくされる中で、補完的に実施されているオンライン教育やシミュレーション教育を、デジタルトランスフォーメーション（DX）の技術を活用して大幅に向上させ、新型コロナウイルスの感染拡大以前の水準以上の実践的な教育プランを構築し、即戦力となり得る高度な医療人材を継続的に養成することを目的に設定されたものです。多くの看護系大学が、この3年間に臨地での実習が制限される中で、コロナ感染禍以前と同等な看護実践力が獲得できる学びを保証することを目標に苦慮し、各領域で工夫をこらしてきました。時間の流れとともに、人々はこの見えないウイルスに対する感染対策や新しい生活様式にも慣れ、社会生活は落ち着きを取り戻しつつある状況の中、本学も実習先の病院や施設等で療養者やスタッフの感染拡大により、臨地での実習が予告なく中断されるという制約が今も続いています。看護学教育においては、この経験を糧に、苦境を乗り越え、未来に向けて先端技術を活用した新たな教育方法の開発が活性化しています。看護学のさらなる発展のために、看護学研究の領域においても、イノベーションから新たな価値を創造し、誰もが健康かつ快適で活力に満ちた質の高い生活を送ることに寄与する研究成果を創出することが求められています。本学の教職員や関係の皆様におかれましては、逆境の中にあっても、果敢に挑戦していただき、その研究成果を今後も引き続き本大学紀要を通して、社会に向けて発信していただきますようお願いしております。

2023年3月